

石橋財団コレクション 特集コーナー展示
Selections from the Ishibashi Foundation Collection

印象派の女性画家たち

Women Impressionists

ARTIZON
MUSEUM

印象派の女性画家たち

19世紀後半のパリ。モネ、ルノワール、シスレー、ピサロ、セザンヌらが相次いで知己を得て、いずれもが写実主義の美学を知り、他方でアカデミズムに強い不満と疑問を感じていました。彼らはマネの洗練された色彩感覚と自由な線描によって近代生活の情景を描いた作品に喚起され、マネのアトリエのあったバティニョール界隈のカフェ・ゲルボアに集い、絵画の革新について新たな手法を練り始め、やがて1874年に記念すべき印象派の第1回展を開催しました。

このグループは、絵画技法、描かれる主題、展覧会における作品の発表の仕方など、あらゆる点でフランスの伝統的な美術の慣習に反旗を翻し、新しい美術を産み出そうという気運に立ちまわっていました。いまだ美術界において女性の立場が十分に尊重されていなかった時代に才気溢れる女性画家たちを仲間に加え、平等な立場で制作し、活動を行ったこともその大きな特徴と言えます。彼女たちはそれぞれの個性をいかんなく発揮し、実績を残したのです。印象派というグループにおける女性の画家たちの活躍を見れば、画壇のそれまで、あるいはその後を見渡しても抜きん出た団体であったと言えます。長い西洋絵画の歴史を見れば、もちろん多くの重要な女性画家たちがいます。しかしベルト・モリゾ、メアリー・カサット、エヴァ・ゴンザレス、マリー・ブラックモンという複数の優れた画家たちを輩出したグループとその環境は非常に特異だったと言えるのではないのでしょうか。結果としてその後、印象派が世界中に影響を与えていく中で、この流派の女性画家の存在は多大な影響を与えたのです。

アーティゾン美術館は、その前身であるブリヂストン美術館の1952年（昭和27年）の開館より、印象派の絵画をコレクションの中心のひとつに据えてまいりましたが、美術館の開館に向けてこの分野をより充実させるべく、印象派を代表する4人の女性画家たちの5点の作品をコレクションに迎えることが出来ました。このたびのコレクション展の特集コーナー展示にて、これらの作品と館蔵の関連作品、さらには同様に新しく収集された西洋の芸術家の肖像のヴィンテージ写真のコレクションからの関連写真作品とともに一挙公開いたします。

石橋財団コレクション選
特集コーナー展示
印象派の女性画家たち

メアリー・カサット

ベルト・モリゾ

エヴァ・ゴンザレス

マリー・ブラックモン

Women Impressionists

In Paris during the second half of the nineteenth century, Monet, Renoir, Sisley, Pissarro, and Cézanne met each other. All were acquainted with realist aesthetics and questioned Academism, with which they were deeply dissatisfied. They produced paintings of scenes from modern life inspired by Manet's free use of line and refined color sensibility. They met at the Café Guerbois near Manet's atelier in Batignolles, where they discussed new techniques that would revolutionize painting. Then, in 1874, a year to remember, they organized the first Impressionist exhibition.

The moment had come for this group to launch a revolt against all elements of traditional French art, in painting technique, choice of subjects, and the way works were exhibited. There was, moreover, another aspect in which the Impressionists were different. In an era when women were not fully respected by the art world, many talented women joined their group and were treated as creators on an equal footing with men. These women Impressionists were as fully individual as their male counterparts and left us a substantial body of remarkable art. In their inclusion of women, the Impressionists were truly extraordinary compared to other art movements either before or after them. In the long history of Western art, there have, of course, been many important women artists. The Impressionists' inclusion of a large cohort of women who included Berthe Morisot, Mary Cassatt, Eva Gonzalès, and Marie Bracquemond was, however, remarkable. The impact of these women was a major factor in the influence of the Impressionists on later art history.

Since the Artizon Museum's founding as the Bridgestone Museum in 1952, the Impressionists have been one of the primary foci of our collection. To develop our collection more fully in preparation for our reopening, the decision was made to acquire five works by these four women Impressionists. It was then decided to display all of them in a special corner, together with related works from our collection and selected works from a recently acquired set of vintage portrait photographs of Western artists.

*Selections from
the Ishibashi Foundation Collection
Special Section*

Women Impressionists

Mary Cassatt

Berthe Morisot

Eva Gonzalès

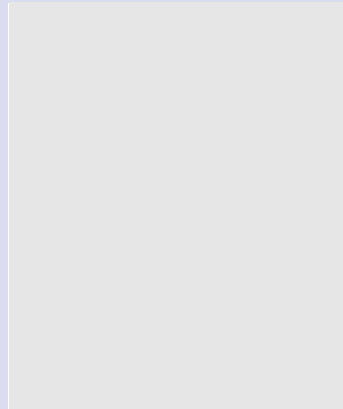
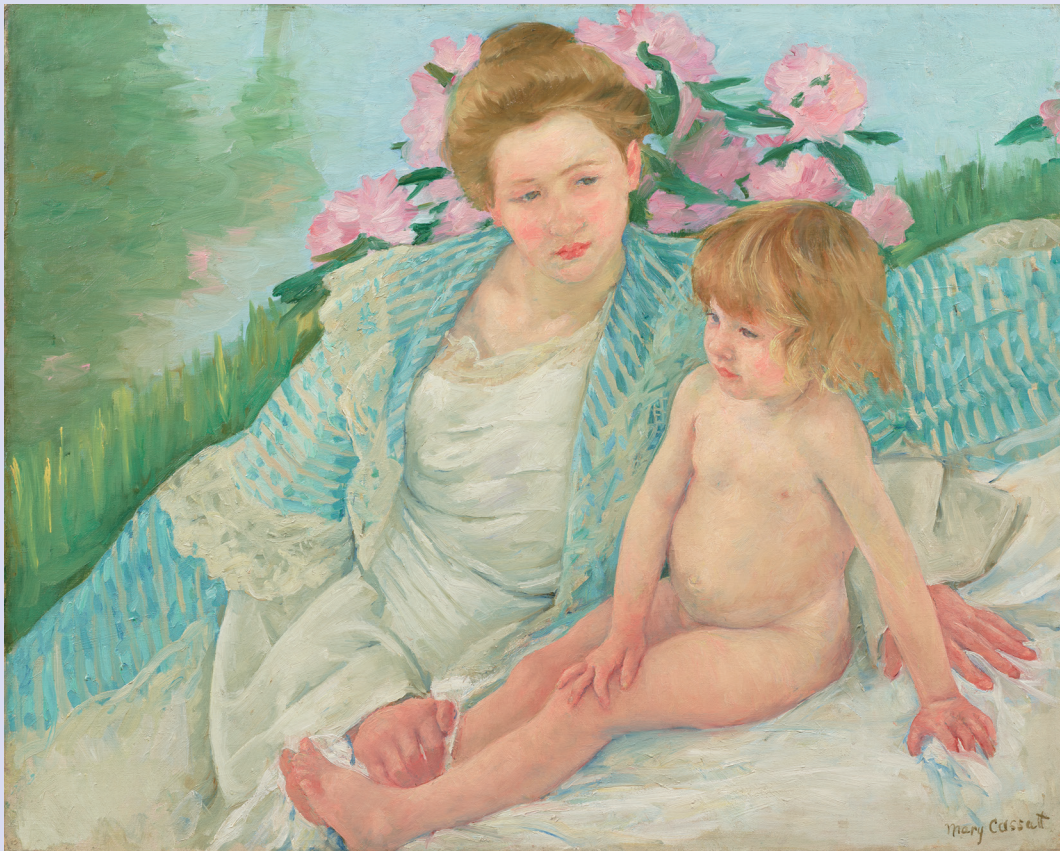
Marie Bracquemond

メアリー・カサット

Mary Cassatt

メアリー・カサット (1844-1926) は、ペンシルベニア州アレゲニーの裕福な家庭に生まれ、幼少より教育のためにヨーロッパをはじめ、世界を旅行しながら育てられました。1851年から4年間、一家でパリ、ハイデルベルクとダルムシュタットで過ごしています。1861年から65年までフィラデルフィアのペンシルベニア美術アカデミーで学んだ後、1866年にパリに渡りました。サロンに出品を続けていましたが、1872年にカミーユ・ピサロに出会い、1879年の第4回展ではじめて印象派展に出品。1886年の最後の印象派展まで出品を続けました。カサットはこのグループの中でドガと親密に交際しました。ドガの高い教養と洗練されたデッサン力に裏付けられた作品に魅せられ、一方でドガもカサットの作品に自らの作品と通じる質を感じ取ったのでした。

カサットは、家族や湯浴みなど母と子を画題とした作品を数多く制作していますが、その愛らしい情景描写や柔らかな陽光の表現が称賛されました。何気ない日常性はカサットの作品に共通する重要な視点であり、観る者を強く惹き付けます。また母親と娘の姿で構成される、しっかりした構図は画面に安定感をもたらしているほか、淡い色で平面的に描かれた作品にはカサットの日本美術、特に浮世絵への傾倒が感じられます。



アルルのサン＝トロフィーム教会のメアリー・カサット
©Mary Cassatt standing in the gardens at St. Trophimes,
Arles, France, ca 1912. (Photo by Fotosearch/Getty Images).

Women Impressionists

Mary Cassatt

日光浴（浴後）

1901年 油彩、カンヴァス
74 × 93cm

The Sun Bath (After the Bath)
1901 Oil on canvas

母子像は、メアリー・カサットが生涯扱った最重要の主題ですが、中でも浴後の幼児とともにいる母親の姿を幾度も描いています。この作品はしばしば描かれた室内の情景ではなく戸外の風景で、川辺の草の上に座って寄り添う母子の姿が描かれています。前景には優雅に横臥する母親と裸の子ども、その後ろにはラベンダー色の木蓮のような花が見えます。後景には、水面に映る木々の緑が揺らぐ様子が捉えられています。

カサットは、1895年にデュラン＝リュエルのニューヨークの画廊で最初の個展を開催し、本作もまた、1903年に開催された同画廊の個展に出品されたものです。1890年代から世紀の転換期にかけては、カサットが最も活動的であった時期でした。この作品は明るい色彩や生氣溢れる筆触に印象派的な要素を見ることが出来ます。対角線上に人物を配置する構図や装飾的な衣装など、この頃の作品に浮世絵の影響を指摘する研究者もいます。



娘に読み聞かせるオーガスタ

1910年 油彩、カンヴァス
116.2 × 88.9cm

Augusta Reading to Her Daughter
1910 Oil on canvas

カサットは、50歳の時、パリ近郊オワーズ県のル・メニル＝テリビュにあるポーフレヌ館を購入しました。これはその城館の緑豊かな庭園で描かれた肖像画です。1890年頃までにすでに名声を確立していたカサットは、身近な家族や友人のみをモデルとする必要がなくなり、女性や子どもをモデルとして雇うようになりました。この作品もその例とされています。母子像というカサットが得意とした主題が明るい色彩で描かれています。カサットは1911年に糖尿病、リウマチや白内障と診断され、1914年には絵筆を置かざるを得なくなってしまいました。したがって、本作はカサットの画業の最後期の作品と言えるでしょう。場面全体の雰囲気としては、子どもの無邪気さや奔放性などがうかがえます。喧騒性は一切感じられず、古典的な宗教画にも通じる静謐な空気や穏やかな母の愛情が画面を支配しています。古典的な絵画の雰囲気をベースとしつつも、印象派的な明るい色彩、日本美術に参考を得たかのような画面構成や装飾性、色面構成などで伝統的な母子像を一新したところに、カサットの革新性がうかがえます。

ベルト・モリゾ

Berthe Morisot

ベルト・モリゾ (1841-1895) は印象派グループの画家としても最も重要視される一人です。素早く、大胆・奔放な筆触と明るい色彩により、近代化するパリの様々な情景のうちに姉エドマなど近親者や身近な知人の人物画や風景画を制作しました。特に母子、画家の娘などを画題とした作品は、繊細さと穏健さを生み出しています。

1841年、ブルジュ市でシェール県官吏の父と、ロココ美術の巨匠フラゴナールの遠縁にあたる母の間に生を受けました。幼少期に姉エドマと共にジョゼフ＝ブノワ・ギシャールの下で絵画を学びながら、ドービニーやギュメなどの作品に影響を受けました。その後、パリに出てバルビゾン派のコローに学び、戸外で制作活動を始めました。1864年にサロン初入選後、ルーヴル美術館で模写をおこなっている最中にサロン画家ファンタン＝ラトゥールの紹介でエドゥアール・マネと出会っています。マネからは以後多大な影響を受けるほか、モネ、ルノワール、ピサロ、バジールなどパティニョール派の画家たちやエミール・ゾラなどの美術批評家と交友を重ねようになり、次第に独自の様式を確立しました。1874年にエドゥアール・マネの弟ウジェーヌ・マネと結婚、4年後の1878年には娘ジュリー・マネが誕生しています。結婚後も第4回印象派展（1879年）以外の全ての印象派展に参加するなど精力的に活動しました。

Women Impressionists

B Morisot

バルコニーの女と子ども

1872年 油彩、カンヴァス
61×50cm

Woman and Child on the Balcony
1872 Oil on canvas

モリゾの画歴において最も評価された作品の一つです。シャイヨー宮にほど近いパシーのバンジャマン・フランクリン通りの家から描かれました。着飾った女性と子どもがバルコニーから眼下に広がるパリの景観を見渡しています。トロカデロ庭園、セーヌ河、シャン・ド・マルス公園が見えます。地平線の右側にはアンヴァリッドの金色のドームが描かれています。素早く、活気のある筆遣いながら、細部まできめ細やかに描かれています。背景が粗く描かれているのに対し、右上の花瓶に活けられた赤い花やファッショナブルな女性の衣装、子どもの青いリボンと衣装は繊細に仕上げられています。画家はこの絵の素描を制作していますが、これは現在シカゴ美術館に所蔵されています。

女性のモデルは、姉エドマ・ボンティヨン、あるいはもう一人の姉妹であるイヴ・ゴビヤールと推定されています。また子どものモデルは、イヴの娘ポール・ゴビヤール（通称ビシェット）とされています。制作当時はマネと非常に近い関係にあり、この頃の作品は、マネからモリゾへの、さらにはモリゾからマネへの影響が指摘されています。描かれた風景は、第二帝政時にセーヌ県知事オスマンが主導したパリ改造の結果をよく表しており、マネやカイユボットと並んで、モリゾは新しい都市パリの風景を印象派の技法で捉えています。



ベルト・モリゾ 夫と娘とともに
©Berthe Morisot, her husband Eugène Manet and their daughter, Julie, ca 1881. Found in the collection of Musée d'Orsay, Paris. Artist : Anonymous. (Photo by Fine Art Images/Heritage Images/Getty Images)

眠り

1877-78 年頃
油彩、カンヴァス
81 × 100cm

Sleep
Ca. 1877-78 Oil on canvas

画家の妹ジャンヌが、夜の帳が下りた寝室のベッドで目を瞑って静かに横たわっており、その前にある花柄の椅子には薄衣がかけられています。夜の情景ながら、白をアクセントとして随所に用い、マネを思わせる粗いながらも生氣を感じさせる賦彩がなされています。ゴンザレスの代表作の《朝の目覚め》(ブレーメン美術館)は、これとは対照的に若い女性の朝の目覚めを、瑞々しいタッチで描いています。これら2つの作品は、

ほぼ同じ大きさのカンヴァスに同様の構図で描いていることから、対画であると見なす向きが多いようです。ゴンザレスはエドゥアール・マネとシャルル・シャブランに学んでいます。その様式はマネの写実的要素を残しながらの印象主義の様式を示していますが、女性肖像においては、シャブランのロマンティックで感傷的な要素をしばしば示しており、本作もその典型的な作品の一つです。



エヴァ・ゴンザレス

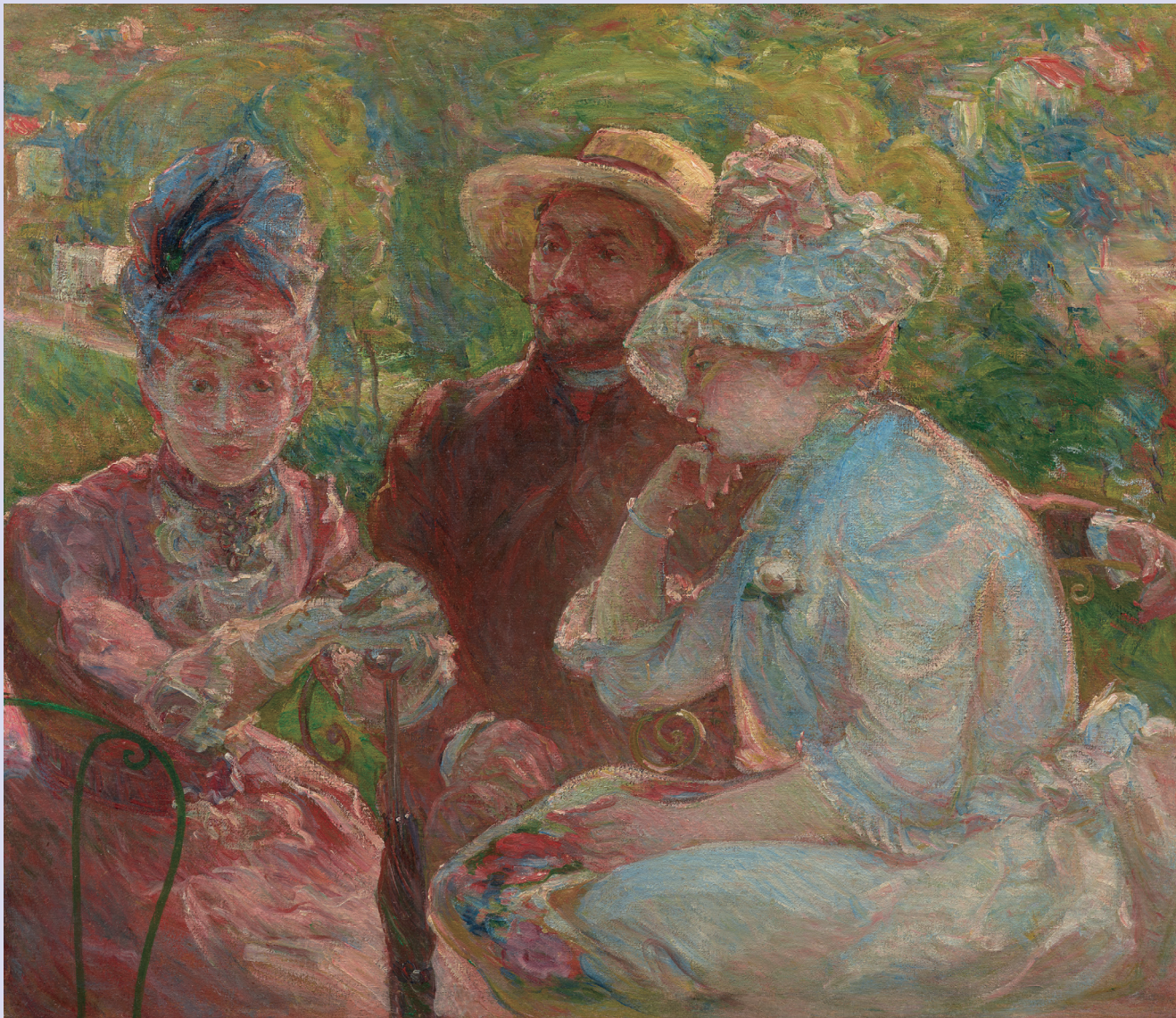
Eva Gonzalès

エヴァ・ゴンザレス (1849-1883) はパリに生まれました。父エマニュエル・ゴンザレスはスペイン人ですが、フランスに帰化した著名な作家で、母親はベルギー出身の音楽家です。父親により早くから文化・芸術的な世界と接点を持ったことが知られています。エヴァは、16歳で肖像画家シャルル・シャブランの女性のためのアトリエで学び始め、1870年にシャブランの弟子としてサロンにデビューしました。

1869年に画家アルフレッド・ステヴァンスの紹介でエドゥアール・マネを紹介され、そのモデルとなり、ついでその弟子となりました。マネの唯一の正式な弟子であり、定期的に指導を受けていました。マネと同様にサロンへの出品を優先したため、第1回印象派展への出品を断り、師と同様に印象派展についぞ出品することはありませんでしたが、その絵画様式により印象派の画家の一人に数えられます。マネをはじめ、印象派の画家たちのモデルをしばしばつとめたことでも有名です。1879年には、画家・彫刻家のアンリ・ゲラルドと結婚しました。夫や妹のジャンヌ、そして母親をモデルとしてしばしば作品を制作しました。1883年4月30日に師のマネが没した直後、ゴンザレスは34歳で息子ジャン・レイモンドを出産しますが、この時、彼女は落命してしまいました。

Eva Gonzalès

エヴァ・ゴンザレス
Eva Gonzalès
©alamy



セーヴルのテラスにて

1880 年 油彩、カンヴァス
56.8 × 64.5cm

On the Terrace at Sèvres
1880 Oil on canvas

後景に見えるのは、パリ郊外のセーヴル風景。モデルが誰であるのかは、明確にはわかっていません。1962 年にパリのベルネーム＝ジュヌ画廊で開催されたブラックモンの回顧展では「ファンタン＝ラトゥール氏とともに、セーヴルのテラスにて」の題名で展示されました。もしこの題名が正しいとすると、描かれている男性は友人ファンタン＝ラトゥールとその左手に妻ヴィクトリア・デュブール、そして右側には画家自身が描かれていると理解されます。一方でブラックモンの息子ピエールは、母親が画中の何れの女性もモデルとして妹のルイズ・キヴォロンを使った、と述

べています。マリー・ブラックモンは、子どもを生んだ後、体調がすぐれなかったためセーヴルに移り住んでいたのですが、そこには妹ルイズも同居していました。夫フェリックスは、セーヴルのテラスのふたりを描いた版画を残していますが、これを見るとマリーが戸外風景を描く時にごここをお気に入りの場所として利用していたことがわかります。モネやルノワールの絵画に学んだその作品は、光が微妙な色調の変化を生み出したことを示しています。例えば、右側の女性の白い衣裳は、太陽の光を受けて輝く様子が、青と淡いピンクで描かれています。

マリー・ブラックモン

Marie Bracquemond

マリー・ブラックモン (1840-1916) はブルターニュ地方のアルジャントン＝アン＝ランダンヴェに海軍士官の父と母の間に生まれました。父親はマリーが生まれて間もなく亡くなり、母親はその後再婚し、各地を転々とした後、パリ近郊のエタンブに落ち着きました。マリーは 10 代の頃より当地で、若い女性向けの絵画教室をひらいていた老齢の画家オーギュスト・ヴァッソールに素描を学びました。

1857 年、16 歳の時、彼女はパリのサロンに応募し、推薦によりアングルに師事することになりました。その後 1859 年のサロンに出展し、1864 年からは連続して出展しています。1867 年に版画家のフェリックス・ブラックモンと出会い、1869 年に結婚しました。夫を通してエドゥアール・マネやエドガー・ドガ、アルフレッド・シスレー、クロード・モネを知り印象派の様式へと移行していきました。そして 1879 年 (第 4 回) と 80 年 (第 5 回)、86 年 (第 8 回) の印象派展に出品したのです。アングルに学んだ新古典主義のしっかりした描法を基礎に印象派の色彩と賦彩を採用した肖像画を中心とした作品は、グループの中でも異彩を放っています。

Marie Bracquemond

マリー・ブラックモン
Marie Bracquemond ©alamy

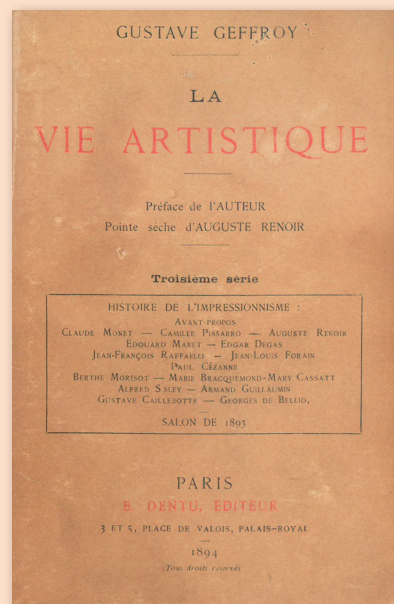
ギュスターヴ・ジェフロワ

『芸術的生活—印象派の歴史』

第3巻、1894年、パリ刊

Gustave Geffroy, *La vie Artistique, Troisième série: Histoire de l'Impressionisme*, E. Dentu, Paris, 1894.

ギュスターヴ・ジェフロワ (1855-1926) はフランスのジャーナリスト、美術批評家。印象派の全容を論じた最初の一人で、この文献においてモネ、ピサロ、マネ、ドガ、ラファエリ、フォーラン、セザンヌについて、第10章でモリゾを、11章でブラックモンを、12章でカサットについて論じています。



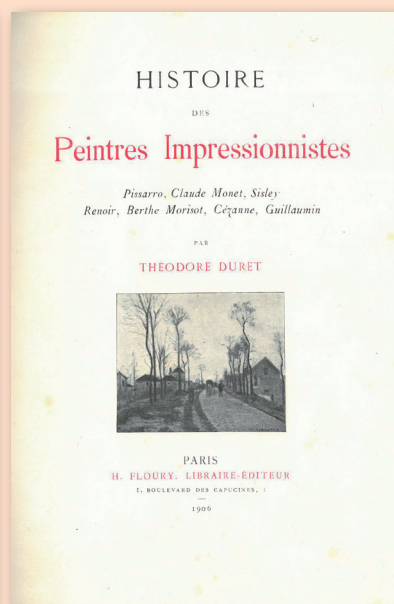
テオドール・デュレ

『印象派の画家たちの歴史—ピサロ、クロード・モネ、シスレー、ルノワール、ベルト・モリゾ、セザンヌ、ギヨマン』

1906年、パリ刊

Théodore Duret, *Histoire des peintres impressionnistes: Pissarro, Claude Monet, Sisley, Renoir, Berthe Morisot, Cézanne, Guillaumin*, H. Floury, Paris, 1906.

テオドール・デュレ (1838-1927) はフランスのジャーナリストで美術批評家。1878年に小冊子『印象派の画家たち』を刊行。モネ、シスレー、ピサロ、ルノワール、モリゾを5人の印象派としました。1906年にこれを



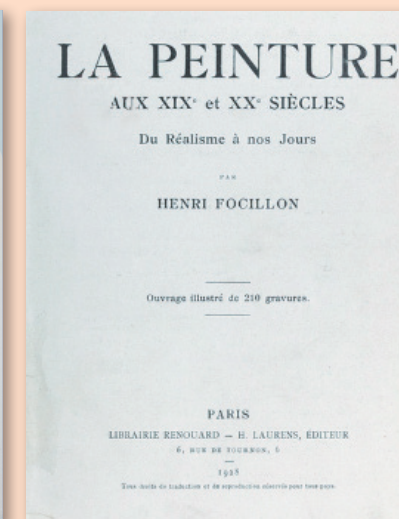
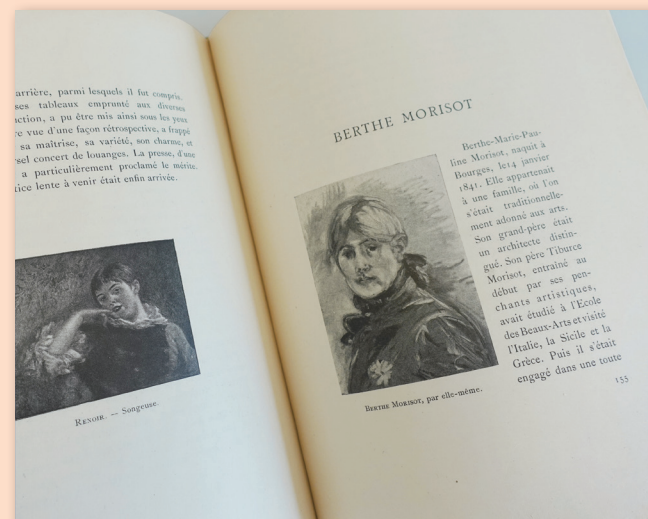
アンリ・フォション

『19世紀から20世紀にかけての絵画—リアリズムから現代まで』

1928年、パリ刊

Henri Focillon, *La peinture aux XIX^e et XX^e siècles: Du Réalisme à nos jours*, (Manuels d'Histoire de l'Art), Librairie Renouard-H. Laurens, Paris, 1928

アンリ・フォション (1881-1943) はフランスの美術史家。中世から近代までの美術に関する重要な著作を多く発表しました。本書は19世紀から20世紀にかけての絵画を論じたもので、この中で、モリゾ、カサット、ブラックモンが印象派の女性画家として記されています。



『印象派の女性画家たち』 (展覧会図録)

シルン・クンストハレ・フランクフルト
2008 年

Exhibition Catalogue, *Women Impressionists: Berthe Morisot, Mary Cassatt, Eva Gonzalès Marie Bracquemond*, edited by Ingrid Pfeiffer & Max Hollein, Schrin Kunsthalle Frankfurt, Frankfurt am Main, Hatje Cantz, 2008.

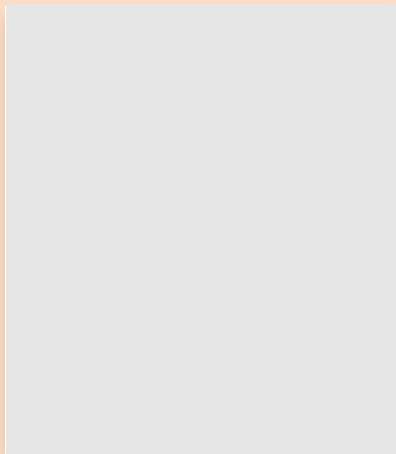
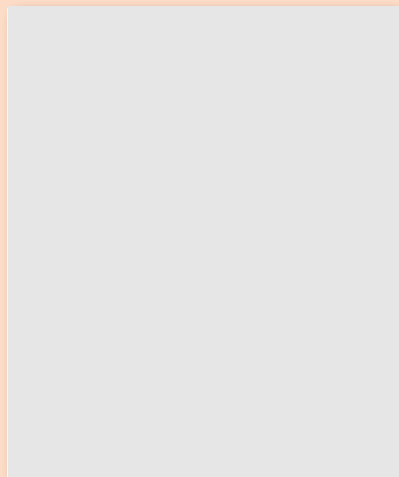
2008年にシルン・クンストハレ・フランクフルトで開催された印象派の女性画家たちを主題とした展覧会。モリゾ、カサット、ゴンザレス、ブラックモンの4人が取り上げられています。

『パリの女性画家たち 1850年 から1900年』(展覧会図録)

デンヴァー美術館、スピード美術館、
クラーク・アート・インスティテュート
2017年

Exhibition Catalogue, *Women Artists in Paris, 1850-1900*, edited by Laurence Madeline, with Bridget Alsdorf et al., Denver Art Museum, Denver, Colorado, Speed Art Museum, Louisville, Kentucky and Clark Art Institute, Williamstown, Massachusetts, American Federation of Arts in association, New York, with Yale University Press, New Haven and London, 2017.

2017年から18年にかけて、デンヴァー美術館他アメリカの美術館で開催された展覧会図録。19世紀後半にパリに集まった4人の画家を含む、11カ国からの36人の画家たちとその活動、作品が取り上げられています。



石橋財団コレクション
特集コーナー展示
印象派の女性画家たち

2020年6月23日(火) – 10月25日(日)
石橋財団アーティゾン美術館

企画・執筆：
新畑 泰秀

デザイン：
田畑 多嘉司
秋本 真奈帆

翻訳：
ルーシー・S.マクレリー

印刷：
株式会社 野毛印刷社

発行・著作：
公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館
〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2

Selections from
the Ishibashi Foundation Collection
Special Section
Women Impressionists

23 June (Tue) – 25 October (Sun), 2020
Artizon Museum, Ishibashi Foundation

Curation and Texts:
Yasuhide Shimabata

Design:
Takashi Tabata
Manaho Akimoto

Translation into English:
Ruth S. McCreery

Printed by
Noge Printing Corp.

Published by
Artizon Museum, Ishibashi Foundation ©2020
1-7-2, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

